

MfG_J_Flower_spots_near_Nagaoka

～ Revised T-2-4 長岡近辺の花の名所（桜、ユキツバキ、他）

1. 長岡近辺の花の名所（桜、ユキツバキ、他）

2. スプリング・エフェメラル
ギフチョウ

3. ユキツバキ
ユキツバキは裏日本性の植物
ツバキとユキツバキ、サザンカの見分け方、
小千谷・愛宕山のユキツバキ

4. 春の里山散策の手控え

ウスバサイシンとは？カンアオイとの違い

1. 長岡近辺の花の名所（桜、ユキツバキ、他）

冬来たりなば、春遠からじ

長岡は雪国ですので、花木は春に次々と咲きます。

桜 福島江、兜橋から福住方面の桜並木風景
悠久山 鑑賞ポイントはいくつかあるが、
お薦めは、桜吹雪の中、瓢箪池前の坂に立つこと。

ふるさとの森の土手側 信濃川さくら堤
その他、市内の各所

ユキツバキ Yukitsubaki, endemic species of camellia in Niigata
隣の小千谷市、愛宕山の全山群生
駐車場が少ないのが難点で、今後の整備に期待。
規模に圧倒される。Overwhelmed by the scale
加茂市・加茂山

カタクリ、水芭蕉の群生 Gregariousness of
カタクリは種子花が咲くまで7から8年かかる。 寿命は40から50年と長命。
カタクリ dogtooth violet 雪国の春を告げる花
Japanese dog's tooth violet and skunk cabbage
随所 ～ポピュラーな場所より、ひっそりとしたハイキングコースがお薦め

雪割草、芝桜、ユリの群生
Gregariousness of Yukiwarisou, Moss phlox and Lilies
雪割草 新潟県を中心に日本海側で見られる、かれんな花。
越後雪割草街道 ～雪国植物園、国営越後丘陵公園、
柏崎市西山町(大崎雪割草の里
変わったところ(5月中旬に見頃)
大柄の(大きな葉の)雪割草の群生
芝桜、ユリは、川口、ほか随所
芝桜 Moss phlox 魚沼市根小屋(関越道堀之内IC近く)

アジサイ Hydrangea
意外に知られていない場所として、近代美術館駐車場から
信濃川さくら堤に上るところに、アジサイの群生
田上・護摩堂山

その他、近隣

近代美術館脇の花壇（長岡市緑地課の管理）アゲハ蝶模様、ほか
その他、各季節の、国営越後丘陵公園、雪国植物園

カツラ並木 Row of Katsura trees

長岡造形大学の正門（春の新緑、晩秋の落葉後の姿）

バラ 国営越後丘陵公園

If winter comes, can spring be far behind?

Nagaoka is in the heavy-snow zone, flowers and trees bloom
successively after snow has melted away.

For example, Narcissus, azalea, camellia, German iris, lilies, rose
and so on.

Chinese peony and peony シャクヤク、ボタン
azalea and camellia ツツジ、ツバキ

These flowers bloom successively within only two months.

2. スプリング・エフェメラル

スプリング・エフェメラル (Spring ephemeral)

春先に花をつけ、夏まで葉をつけると、あとは地下で過ごす一連の草花の総称。

直訳すると「春のはかないもの」「春の短い命」というような意味で、「春の妖精」とも呼ばれています。

カタクリが有名。

ユキワリソウは、ミスミソウの別名です。

身近かなものでは、フクジュソウ (福寿草)

昆虫では、ギフチョウやウスバアゲハ (ウスバシロチョウ) がその代表。

ギフチョウの幼虫の食草は、カンアオイの仲間の

コシノカンアオイ (長野県北部、福井から新潟、山形県の本州日本海側)

く ヒメカンアオイ。

ウスバシロチョウの幼虫の食草はケシ科の

ムラサキケマン、エゾエンゴサク、ヤマエンゴサク。

4章に、春の里山散策のときの「手控え」を作成しました。

カタクリ (片栗、学名: *Erythronium japonicum* Decne.) は、

ユリ科カタクリ属に属する多年草。古語では「堅香子 (かたかご)」と呼ばれていた。

早春に10 cm程の花茎を伸ばし、薄紫から桃色の花を先端に一つ下向きに咲かせる。

早春に地上部に展開し、その後葉や茎は枯れてしまう。

地上に姿を現す期間は4-5週間程度で、

群落での開花期間は2週間程と短い。

このため、ニリンソウなど同様の植物とともに

「スプリング・エフェメラル」(春の妖精)と呼ばれている。

種子にはアリが好む薄黄色のエライオソームという物質が

付いており、アリに拾われることによって生育地を広げている

(同様の例はスミレなどにも見られる)。

かつてはこの鱗茎から抽出したデンプンを片栗粉として調理に

用いていた。精製量がごくわずかであるため、近年は片栗粉にはジャガイモやサツマイモから抽出したデンプン粉が用いられている。

若葉を茹でて、山菜として食されることがある。



ギフチョウ

ギフチョウとヒメギフチョウは、どちらもアゲハチョウの祖先種の特徴をもつ小型のチョウであり、とても似ているが、判前翅の黄線の特徴で区別できる。ヒメギフチョウは、ギフチョウより一回り小型になる。

雪どけ直後の早春、太陽の光がよくとどく雑木林で、羽をいっぱい広げてよく日なたぼっこをして、体があたたまりと地上すれすれにゆったりと飛び回る。

みつを吸いにいく花はカタクリ、ショウジョウバカマ、スマレ、ハルリンドウといった背丈の低い草が多い。里山の開けた道で、カタクリ、ショウジョウバカマ、スマレの群生に、飛び回っている理由は、ここにある。



原始的なチョウとして似た特徴をもつ2種類のチョウなのに、生息地域がはっきり分かれている理由は、幼虫がたべる葉のちがい。

ギフチョウの幼虫は基本的にカンアオイの仲間のヒメカンアオイという草の葉をたべ、ヒメギフチョウの幼虫はウスバサイシンをたべる。

ギフチョウの祖先は、第三紀といわれる3000万年前、すでに地球上に生息していたとされている。

そして200万年前の第四紀ころに日本に渡ってきたようだ。

それから約1万年前に最後の氷期が終わるまで、何回もの氷期を、生活する場所を変えたり、形を変えながら生きのびてきた。



原始的なチョウとして似た特徴をもつ2種類のチョウなのに、生息地域がはっきり分かれているのは、幼虫がたべる葉のちがい。ギフチョウの幼虫は基本的にカンアオイの仲間のヒメカンアオイという植物の葉をたべ、ヒメギフチョウの幼虫はウスバサイシンをたべるからである。この2種類の植物の分布とかさなり合うようにチョウの分布も本州中央部の東と西で分けられている。

この分布境界線は「リュウドルフィア線」と呼ばれていて、ライン上にはギフチョウとヒメギフチョウのまじりあってすむ地帯が8ヶ所ほど確認されている。新潟県の西端の姫川流域もその一つ。特に源流域や糸魚川市の平岩付近では、両方のチョウを観察できるチャンスがあるという。4月下旬から5月下旬にかけて「春の女神」と呼ばれる。

もっと大きな範囲でいうと、ギフチョウは日本の本州にしか生息していない。それに対してヒメギフチョウは日本の本州、北海道のほか朝鮮半島から北の地域にも広く分布しているんだ。

3. ユキツバキ

戦前までは沖縄を除く日本のツバキ属はヤブツバキとサザンカのみと思われていたところ、このユキツバキが発見されました。

(明治39年に、阿賀町の麒麟山で発見・命名されました。)

ユキツバキがヤブツバキと異なることが明確にされた、いわばユキツバキが「発見」されたのは1947年のことだが、それまで存在が知られていなかったわけではないようです。

江戸時代以前から阿賀町の麒麟山の地元住民により種子油の採取や、観賞用として栽培や品種改良がおこなわれていたそうです。

ツバキとの区別法

- ・自生種のツバキはヤブツバキ(ヤマツバキ)と呼ばれ、雄しべの花糸が白く根本が癒着しています。
- ユキツバキは花糸が黄色で一本一本が分離しています。
- ・ユキツバキの葉柄は短くて毛が生えているのに対し、ツバキ(ヤブツバキ)の葉柄は長く、毛はない。
- ・葉もユキツバキの方が鋸歯が鋭く葉脈が細い脈まではっきりしているのが特徴です。

ツバキと山茶花・サザンカの区別法

- ・ツバキは花の頭ごとボトッと落ちますが、片やサザンカは花びらが1枚1枚、パラパラと散ります。

以下、詳細。

ツバキとユキツバキ、サザンカの見分け方、
自生種のツバキは、ヤブツバキ(ヤマツバキ)と呼ばれる。

雄しべの花糸が白く根本が癒着している。

ユキツバキは花糸が黄色で一本一本が分離している。

葉もユキツバキの方が鋸歯が鋭く葉脈が細い脈まではっきりしているのが特徴。

寒椿、夏椿、山茶花、

戦前までは沖縄を除く日本のツバキ属はヤブツバキとサザンカのみと思われていた所、このユキツバキが発見されツバキの国に衝撃が走ったという。

	椿(ツバキ)	ユキツバキ	山茶花(サザンカ)
開花の時期	12月～4月		10月～12月
花の散り方	花が散る時に、 花首から落ちる		花が散る時は、 花びらが落ちる
花が	やや筒状で 立体的で厚みがある	薄く開いたかたち	ツバキよりも 平面的で薄い
おじべは	白く筒状 単体おしべ	下部わずか 癒着	黄色で一本づつ 分離
めしべは	3から5裂	先端3裂	
葉、葉脈、 鋸歯 (葉のふちの ギザギザ)	ワックスがかかった ように艶々 中心の葉脈がクリア。 鋸歯が浅い	表面に艶はない。 縁にギザギザ、 中心の葉脈が 黒っぽい。 鋸歯がツバキより深い。	表面に艶はない。 縁にギザギザ、 中心の葉脈が 黒っぽい。 鋸歯がツバキより深い。
葉裏の毛	裏返しても 殆ど毛がない	裏返すと葉脈に 沿って毛、特に 付け根に細か い毛が密集	裏返すと葉脈に 沿って毛、特に 付け根に細か い毛が密集
木は	幹は上に伸び、 高くなる。	幹は斜めに這うように 延び、高くない。	幹は斜めに這うように 延び、高くない。
枝	折れやすい	しなやか。	
分布	沿岸部	日本海側、内陸部	

夏椿は、ツバキ科ナツツバキ属。

開花時期は、梅雨の6月～7月です。

落葉高木で、葉は低い鋸状になっており、花の色は白く縁に
細かいギザギザがあり、花は朝から夕方まで咲いた後、1日で
落花し、根元から落ちる1日花です。

椿科の植物ですが、常緑樹の椿と違って落葉します。

別名は沙羅樹(シャラノキ)で、本来別の種ですが、お寺の
敷地内に沙羅双樹(サラソウジュ)として植えられていることが
多いそうです。 木の幹がつるつるしているので、サルスベリと呼ばれている
地域もあります。

寒椿、カンツバキはツバキの名を持ち、サザンカとツバキの交雑
種ですが、どちらかという、サザンカに分類されています。

ユキツバキは裏日本性の植物

約 100 年前に新潟県阿賀町の麒麟山において(世界で初めて)発見。
裏日本性の植物で、分布しているのは積雪深が年間 150cm 以上の範囲と
ほぼ一致している。

最初の発見者は女子高生で、植物観察会の帰路、持ち帰った椿を
先生に見せたら、「もしかしたら、・・・」ということで、大學に持ち込み、
新種と判明。

さざんか、ヤブツバキ、ユキツバキの三種。
ピンクのユキツバキを、「ユキオグニ」と呼ぶ。

<https://www.biodic.go.jp/reports/3-4/c013.html>

落葉広葉樹林(夏緑林)

ブナやミズナラが優占する落葉広葉樹林は日本の温帯(冷温帯)を代表する。
ブナ林では表日本型、裏日本型、内陸型の気候で、林を構成する種にかなりの
違いがみられる。これはブナ林がいったん成立した後の気候の地方的な
特殊化に適応した、種の置き換えや、種そのものの分化がすすんだために
おこった現象とみることができる。

表日本型のブナ林はクマシデ、スズタケなどを含み、
裏日本側のブナ林はヒメアオキ、チシマザキなどを含むことを特徴とする。
また、スギやヒノキアスナロ、ウラジロモミなどがブナと混交林をつくるものもある。
内陸型の気候がわりあい顕著な長野県ではブナそのものは少なく、
ウラジロモミを主とした森林となる。

落葉広葉樹林ではブナ林のほかに、トチノキ、サワグルミ、シオジなどが
形成する溪谷林が代表的なものである。

小千谷・愛宕山のユキツバキ

愛宕山のユキツバキの群生は1ヘクタールの広さがあり、日本有数の広さといわれています。
小国の山口育英奨学会などの財政支援を得て、数年間の背の高い雑木林を伐採し、ユキツバキの見事な群生になりつつあります。

駐車場はご近所の吉蔵寺さんの駐車場が利用可のときもあります。
山門を左に登って下さい。(新潟県小千谷市桜町3757 吉蔵寺)
また、シーズンには、山野草や花木育成の専門の方がボランティアで現地駐在して、ユキツバキの特性やその他の植物全般の疑問に
お答えしています。
白山運動公園の駐車場を利用することも、いいと思います。



4. 春の里山散策の手控え

コシノコバイモ (越の小貝母)

山地林内に生える多年草。高さ10cmほど、花は早茎の先に一つつき、下向きに垂れて咲く。花には斑紋があり、内側の3枚には縁に突起がある。主に北陸(越)に分布。栽培されるバイモより小型。



ショウジョウバカマ(猩々袴)は、ユリ科ショウジョウバカマ属の多年草。北海道から九州までの、やや湿った場所に生える。垂直分布が広く、人里近くの田んぼの畦道から高山帯の高層湿原まで生えている。

葉は広い線形でなめらか、根本から多数出てロゼット状に平らに広がる。花茎はその中から出て高さは10～20cm、先端に横向きに花が付く。花の色は生育場所によって、淡紅色、紫色、白色と変化に富んでいる。



ミズバショウ

いつもは五月に入ってから開花するが、今年は雪解けが三月末で、四月の十日の今日、既に咲いてしまった。

シンガシラ

シンガシラ(*Blechnum nipponicum* (Kunze) Makino)は、シダ植物門シンガシラ科ヒリュウシダ属に属する植物で、木陰のやや湿った斜面にはえる。日本各地でごく普通種であり、はっきりした形の葉を密集してつけるので、よく目立つ。

茎はごく短く立ち上がり、茎には多数の葉を密生する。葉の大部分は栄養葉で、ロゼット状に広がる。少数の孢子葉はやや立ち上がる。茎には鱗片を密生し、葉の基部にも少しつく。

栄養葉は一回羽状複葉で、深緑でやや厚みがあり、つやはない。北海道から九州、屋久島までの山林や山間部の村落周辺などに見られる。日本固有の種であるが、琉球列島には分布しない。この属の植物は南半球を中心に約200種があり、日本には5種ばかりが知られる。



ミチノクエンゴグサ 陸奥延胡索



オクチョウジザクラ

クロモジ
黄色の小さな花

クロモジは、クスノキ科の落葉低木。枝を高級楊枝の材料とし、楊枝自体も黒文字と呼ばれる。香料の黒文字油がとれる。若枝ははじめ毛があるが次第になくなり、緑色のすべすべした肌に、次第に黒い斑紋がでることが多い。古くなると次第にざらついた灰色の樹皮に覆われる。葉は洋紙質で楕円形、深緑でつやはない。葉裏はやや白っぽい。

タムシバ コブシと似ているが別種



タムシバ

(田虫葉、学名: *Magnolia salicifolia*) はモクレン科モクレン属落葉小高木。別名を「ニオイコブシ」といい、花には芳香がある。早春に白い6弁花を葉に先立って咲かせる。他に「カムシバ」の別名をもつ。「噛む柴」で、葉を噛むとキシリトールのような甘味があるためにこの名前がついた。これが転じて「タムシバ」となったといわれる。花はコブシに似るが、コブシが花の下に

葉が一枚ついているのに対し、タムシバは花の下に葉がないので見分けは容易である。葉はコブシの葉が広倒卵形であるのに対し、タムシバは広披針形または長楕円形で、かつタムシバの方が細長い。葉裏もタムシバの葉裏は白味を帯びている(コブシは緑色)。またタムシバの葉は噛むと独特の甘味がある。果実は袋果が集まった集合果で、タムシバの果実はコブシに比べるとやや小型で、形も捻じ曲がらない。

コブシとモクレン



コブシ

コブシ(辛夷、学名: *Magnolia kobus*)はモクレン科モクレン属の落葉広葉樹の高木。早春に他の木々に先駆けて白い花を梢いっぱいに咲かせる。別名「田打ち桜」。果実は集合果であり、にぎりこぶし状のデコボコがある。この果実の形状がコブシの名前の由来である。高さは18m、幹の直径は概ね60cmに達する。3月から5月にかけて、枝先に直径6-10cmの花を咲かせる。花は純白で、基部は桃色を帯びる。花弁は6枚。枝は太いが折れやすい。



コブシは花の



モク

モクレン(木蓮、木蘭、*Magnolia quinquepeta*)モクレン目モクレン科モクレン属の落葉低木。花が紫色であることから、シモクレン(紫木蓮)の別名もある。花は濃い紅色から桃色で、花弁小型で樹高3-5m程度。葉は互生で、広卵型、長さ8-10cm、先は尖る。

ハクモクレン(白木蓮、学名: *Magnolia heptapeta*)はモクレンの仲間で白色の花をつける。しばしば、「モクレン」と混同され、そう呼ばれることがある。モクレン属の中では大型の種類で樹高は10-15m程度まで成長する、春、葉に先立って大形で白色の花が開く。

アケボノスミレ(スミレ科) *Viola rossii*

最大の特徴は葉の展開前に花が咲くということ。大きな桃色の花が林床からによきと桃色の花だけを出している光景はちょっと奇妙です。



サイハイラン

サイハイラン(采配蘭)は、ラン科サイハイラン属の多年草。ふつう1葉がつく。葉の基部は鞘状になって茎を抱く。



タネツケバナ(種漬花、*Cardamine scutata*)はアブラナ科タネツケバナ属の植物の一種。水田などの水辺に群生する雑草。全体に柔らかい越年草、あるいは一年草。高さは10-30cm、茎の根本と下部に一回羽状複葉の葉をつける。花は茎の先端に穂状花序をなし、花弁は白、果実は棒状で上を向く。七草がゆの際には、春の七草のナズナと間違えられる例もある。果実の形が違うので判別は難しくないが、別に毒はないし食べられるので間違えても実害はない。



アオキとヒメアオキ



ヒメアオキは若葉葉柄に微毛がある。(アオキは無毛)
鋸歯はアオキに比べ浅くて目立たないが、2〜7個ある

ヒメアオキ

ヒメアオキ

葉の形は長楕円形で、葉の縁には粗い鋸歯がある。
雌雄異株。花期は3〜5月で、小さい褐色の花をつける。
果実は卵形の液果で、種子を1個含み、秋頃から赤く熟し、翌年の開花の頃までついている。
わざと虫に寄生させ、遠くに種を運ばせることもあると、言われています。

アオキ(青木、学名: *Aucuba japonica*)は、ガリア科またはアオキ科 (Aucubaceae) アオキ属の常緑低木。和名の由来は、常緑で枝も青いため。常緑の高さは2mほどの低木で、枝は太く緑色。

ウスバサイシンとは？カンアオイとの違い

カンアオイとは葉の色や形が似ていますが、

ウスバサイシンは「落葉性」なのに対して、

カンアオイは冬でも落葉しない「常緑性」という違いがあります。



カンアオイ



コシノカンアオイ

ウスバサイシン

